

Augsburg を訪れて

山村 絵理

2012 年 8 月 24 日（金）私たち尼崎市青年使節団はまだ見ぬドイツの地へ思いを募らせながら、関西国際空港を後にしました。アムステルダムを経由し、ドイツベルリンに到着したのは現地時間の 18 時半ごろ。出発してから実に 15 時間経っていました。長い長い往路であったにもかかわらず体が重いというようなことは全くなく、人生初めてのヨーロッパ上陸に、むしろ心は踊り体も弾むようでした。

ベルリン

アウクスブルクへ行くまでに私たちはベルリンに 2 泊し、ベルリンの壁やブランデンブルク門、ポツダム広場、ベルリン大聖堂、かつての東西ドイツの国境検問所であるチェックポイントチャーリー跡など、ベルリンの観光名所となっているところを、少し駆け足気味ではありましたがたくさん巡りました。

東西ドイツが統一してから約 20 年。いまだ旧東ドイツ側と旧西ドイツ側ではどこことなく雰囲気は異なっていました。一番わかりやすいのが建物の色です。西側の建物はカラフルなものが多いのに比べ、東側にはグレーが多く、当時の東と西の統治体制の違いを肌で感じ取ることができました。ドイツの歴史を知る上で、ベルリンを訪れることは非常に大きな意味を持つと思いました。

しかしながらやはりヨーロッパです。日本とは建物の造りも建て方も違うし、多くの人がベランダにきれいな花を飾り、石畳

の道の脇には BMW やフォルクスワーゲンなどの車が並び、それらを見ながらの朝の散歩は楽しく、気候も良かったのでとても気持ち良かったです。



ベルリン大聖堂

ホストファミリーと対面

8 月 26 日（日）ホストファミリーと対面すべくベルリンから再び飛行機に乗りミュンヘン空港へ。そこで長浜市青年使節団と合流し、専用バスにてアウクスブルクへ向かいました。ホストファミリーへの引渡しが行われるレストランに着くまでの 1 時間弱の道中のバスからの景色は、ずっとともろこし畑や牧場、美しい草原などが見晴らしよく広がっていて、たまに赤レンガの家が見えるくらいでした。街らしきものは一切見えず、30 分、40 分と時間が過ぎ、到着予定時刻に近づくにつれ、不安や緊張、がどんどん膨らみました。

バスから降りると外はとても寒く、スーツケースを受け取るとすぐにホストファミリーの待つレストランへ駆け込みました。会場へ入ると大勢のドイツ人からの視線を一気に浴び一瞬硬直しましたが、どの家族

も笑顔で私たちを迎えてくれ、とても歓迎してくれました。

ホストファミリー

私のホストファミリーは、この3月にアウクスブルク市青年使節団の団員として尼崎市に来た Andrea とその家族です。Andrea は小さい頃からバレエを習っていて、私がドイツに行った時は夏休み中だったようですが、今でも週5日レッスンを受けています。2007年には日本にも踊りに来ているほどすごいダンサーで、家の壁には踊っている写真や絵がたくさん飾られ、Andrea の部屋には数え切れないほどのトウシューズが飾られていました。ホストファーザーは歯科医で、アウクスブルク市内で歯科医院を開業しています。ホームステイ先が決まったときに載せられた写真を見て少し硬そうな人という印象を持っていたのですが、実際はとてもユニークで愛情深く、オヤジギャグ?的なこともよくおっしゃる方で、いつも楽しませてくれました。初めて対面した時もニコニコと私の顔をのぞきながら、イスを引いて隣に座らせてくれ、とても緊張していた私をホッとさせてくれたのを覚えています。ホストマザーは本当に料理が上手で、デザートケーキまでいつも手作り。どの料理もレストランで食べる物より何倍も美味しく、家での夕食は毎日楽しみでした。

茶目っ気たっぷりのホストファーザーに家族は慣れた様子でさらっと受け流すというような場面も多々ありましたが、それもまた調和がとれた様子でとても仲の良い家族でした。



フェアウェルパーティーで家族写真

アウクスブルク

Andrea の家はアウクスブルクの郊外にあり、家の裏には広大な土地が広がり、少し丘になったところに高台がありました。ホームステイ初日に Andrea と愛犬 Monty と一緒に家の近所を散歩した時、そこに登ってアウクスブルクを一望しました。高台から見たアウクスブルクは屋根の赤色と草木の緑色が見事なコントラストを成しており、毎日の集合場所であった市庁舎も見ることができました。目の前に広がる美しい景色をしっかりと目に焼き付け、これから始まるアウクスブルクでの生活によりいっそう期待を膨らませました。



アウクスブルクの街並みは、石畳にカラフルでかわいらしい建物、古く歴史が感じられる建造物も多くあり趣深く、市内だけでも観て回れるところが盛りだくさんです。アウクスブルクには日本にはないしっとりとした素敵な雰囲気がありました。

ベルリンとミュンヘンにも行きましたが、私はアウクスブルクの街並みが一番好きでした。



アウクスブルクの街並み

ブレラー市民祭り

8月28日(火)アウクスブルク3日目、プログラムにはブレラー市民祭りというアウクスブルクのビール祭りの視察がありました。ドイツに来て本場のビール祭りに参加できるということで、とても楽しみにしていました。

ビール祭りといえば、ミュンヘンで開催されるオクトーバーフェストが最大級の規模で世界的にも有名ですが、ブレラー市民祭りにも歴史がありアウクスブルク市民にとって欠かせない重要な行事だそうです、約2週間にわたって開催されます。ビール祭りでは、私たちが日本でお祭りに行く際に浴衣を着ていくのと同じような感覚で、多くの人がドイツの民族衣装を着て参加します。そのためショーウィンドウに民族衣装を飾っている店をよく目にしました。流行



りもあり、ちなみに女性ものでは昨年はスカートは短めが、今年は長めのものが流行りだそうです。

このプログラムでは Andrea 他、アウクスブルク市青年使節団員もみんな民族衣装

着用で来てくれ一緒に視察しました。祭りには移動式の観覧車やコースターなどのアトラクションもあり遊園地のようで、それらがどのように動いているか裏側を見せていただいたり、実際に体験させていただいたりしました。移動式ながら、本格的でスリルもあり最高にエキサイティングでした。

さらにメインのビールテントにはアウクスブルク市長も駆けつけてくださり、ステージ前のテーブルに座らせていただきました。市長の紹介によりテントいっぱいの市民の方々からもアウクスブルク訪問の歓迎を受け、なんだか有名人になった気分でした。



ブレラー市民祭りにて

ドイツの子どもたち

視察先の幼稚園、学童保育所で子どもたちは見慣れない日本人が大勢訪問に来て少し驚いたようですが、みんな少し照れながらもかわいらしい笑顔で手を振ってくれました。幼稚園に同じ形の木の板をいくつも積み立てて遊んでいる男の子がいたのですが、その作品のクオリティーの高さにはとても驚かされました。さらに学童保育所では小学生の男の子がすでにレディーファーストをわきまえており、紳士的であったことにとても驚きました。彼らは親の背中を

見て、知らず知らずのうちにレディーファーストを身につけたのだと思います。

彼らが未来のアウクスブルク市青年使節団員となり、尼崎へやって来てくれることを期待したいと思います。



幼稚園の男の子の力作

プログラムを終えても・・・

1 日のプログラムを終えてからも、楽しい時間はまだまだ続きます。Bar に連れて行ってもらったり、アウクスブルク、尼崎そして長浜の団員で BBQ パーティーやボウリング大会、他の団員のホストファミリーを訪問したり、出発前夜もクラブへ。アウクスブルク市青年使節団のみんなは私たちのために色々な事を企画してくれました。同年代の彼らと過ごす時間はとても楽しいものでした。



8月30日(木) ボウリング大会！

ドイツの食文化 主食

滞在期間中の食事では毎回パンかジャガイモ、あるいは両方を食べました。私もそ

うでしたがドイツといえばジャガイモとよく連想されますが、ジャガイモ年間 1 人当たり供給量は 72.00kg で、日本の 21.30kg と比べると 3 倍以上の消費量で、やはり「ジャガイモいっぱい食べるなあ」という印象を受けます。確かにドイツ滞在中の食事には必ず 1 日 1 回は肉や魚料理と一緒にかなりの量のジャガイモを食べました。

しかしながらヨーロッパのジャガイモ年間 1 人当たり供給量の平均は 85.50kg と、ドイツの平均よりも高い。周辺諸国と比較してみても日本人が思うような「ドイツ＝ジャガイモ！」と言えるほど抜きん出て高いという印象はあまり受けないような感じもしました。ドイツのジャガイモ消費量は年々減少傾向にあり、なぜそのようなイメージが日本人に根付いているのかはわかりませんが、ジャガイモも主食の 1 つであることに変わりはないようですが・・・。

	消費量(kg/人・年)
ポーランド	116.90
ロシア	114.00
イギリス	104.50
オランダ	93.50
ベルギー	76.20
デンマーク	75.90
ドイツ	72.00
チェコ	63.10
オーストリア	62.80
フランス	53.20
ルクセンブルク	49.10
スイス	44.60
日本	21.30
EU平均	85.50

<ジャガイモ年間 1 人当たりの供給量
(資料 FAO 2009)>

もちろんパンの消費も多く、街にはパン屋がたくさんあり、売られているパンの種類もとても豊富でした。ホームステイ先でも毎朝食パンで、いつも 3～5 種類ほどのパ

ンが用意されており、日によって種類も少し違いました。



ホームステイでの朝食。この日はプレッツェルも

ドイツの食文化 ドイツの家庭料理

私がドイツで食べた代表的な家庭料理を紹介したいと思います。



ドイツのパスタ “ Spätzle(シュペッツレ)

Spätzle は短く、不均一な形をしているパスタで、私たちがよく食べるものよりももちもちとした食感です。トマトソースよりもクリームソースやチーズを絡めたりして食べることが多いそうです。写真の Spätzle はチーズを絡めたものでミュンヘンのレストランで食べました。Andrea にとってはチーズの量が少なかったようですが…。家

でもホストマザーが鶏肉の入ったクリームソースのものを作ってくれました。どちらも美味しかったです。

ドイツの食文化 デザート文化

日本では一般家庭において食事の最後にデザートを食べる習慣はあまりありません。一方ドイツ人は甘いものが好きらしく、食事の締めには甘いデザートが欠かせないようで Popa 家でも食事の最後はホストマザーの手作りケーキを食べました。ホストファーザーも甘いケーキが大好きです。BBQ パーティーの時もそのお家のママが2種類のケーキを作ってくれていました。日本ではケーキは買うものですが、ドイツではケーキは家で作るものようです。

甘いものの好きの私にとって、毎日食事の最後にケーキが食べられて幸せでしたが、いつも前菜、メインですでおなかがいっぱいになるので、十分にデザートを堪能することができなかったのが残念でなりません。



ホストマザー手作り Zwetschigen kuchen(ツヴェチュゲンクーヘン：プラムケーキ)



ホストマザーが2日かけて作ってくれたティラミス

余談ですが、バウムクーヘンはドイツで生まれたもので、「クーヘン」はドイツ語で「ケーキ」を意味します。日本でもいろんな店で売られていて、誰もが食べたことがあると思います。しかしながら本場ドイツでは食べたことのない人も多く、中にはバウムクーヘンを知らない人もいます。ドイツ人が日本にやって来て初めてバウムクーヘンを見えるということもあるようで、なんとも不思議な現象です。

最後に・・・!

アウクスブルクを訪問し、得た経験は、尼崎市青年使節団であったからこそできたものだと思います。アウクスブルクでの日々はいつも発見の連続で、一言に「楽しかった」ではとても足りないくらい充実したものでした。歴史ある姉妹都市交流の歴史の1ページに名を連ねることができたことを幸せに思います。本当にたくさんの素敵な方々と出会うことができました。この出会いに感謝するとともに、この青年交流を通して得たアウクスブルク、長浜そして尼崎の団員と築いた友情は一生の宝物となりました。アウクスブルクと尼崎に歴史ある姉妹都市交流があることをより多くの人

にぜひ知って欲しいと思いました。そしてこれからもアウクスブルクとの友好を深め、青年交流が続いていくことを願います。

< 参考 >

国際連合食料農業機関 FAO 統計データベース (FAOSTAT) <http://faostat.fao.org/>

